

「ちゃんと言えたほうにご褒美かな？」

しかし、駿介がそう言う——。

「クリトリスう！」

「……クリトリス……です！」

やっぱり同時に、今度は答えがかえってきた。

可憐な唇からみれるその卑語が、駿介の情炎を煽る。

「正解。よくできました。——ほとんど同時だったけど、優羽が少し早かったかな」

「……………え……………」

駿介の言葉に、美夜がしゅんと頭を垂れる。優羽は後ろにいる駿介を振りかえった。

「お兄ちゃん。優羽はいいから、美夜ちゃんに入れてあげてね」

(優羽、早口になってる……)

「……………いいのか？」

優羽は、コクンとうなずいた。

「うん！ 優羽のほうがお姉さんだから、今日は譲ってあげるの！」

美夜が弾かれたように顔をあげる。

「……………そんなの、だめです」

優羽は、美夜の頭をなでなでして微笑む。

「ううん、いいの。だって、これから何回だって三人でできるもん。だから今日は美夜ちゃんに譲ってあげる。妹はお姉さんの言うこと聞けばいいんだよ！——ねっ？」

美夜は、少し驚いたような顔をしたあとふんわりと微笑んだ。

「……はい、お姉さん」

「うん！」

優羽は、妹の頭を撫でることがうれしくてならないようで、何度も撫でまわす。

「美夜、それじゃ、入れるから」

駿介はそう言って、美夜の腰を引き寄せ、ぐいっと肉棒を突き立てた。

とろけきったソコは、ズルズルと駿介の怒張を呑みこんでいく。その脇から愛液がトロトロと溢れでてシートに滴^{した}った。

「……はああああ……お兄さんのが……入って……入って……入って……入って……」

白く華奢^{みやしや}な背中が、ビクンと反りかえる。

（くはあっ！……やっぱ、気持ちいい……）

駿介は、プルプルの尻肉をつかんで、抽送をはじめた。

「……すごい……太くて……熱い……あふう……はあう……」

ゆっくりだった出し入れに、スピードとリズムをつける。

ぎच्चゅぎच्चゅと音が鳴りはじめ、愉悦が駿介の脳裏にひろがっていく。

駿介は、片手を美夜の尻から離し、優羽の秘裂に当てた。

「きゃう！……はううう……ん！」

そのまま指先をクレヴァスのなかに滑りこませて蠢かすと、優羽が甘い声をもらした。

乱暴に腰と指を動かし、快楽の底を探りだす。

美夜は、ほとんど上半身をべったりとベッドに押しつけ、高く掲げた尻をプリプリ振って駿介に応えようとしている。妹のなかを自分のモノが出入りするさまは、興奮する。駿介は、見れば見るほどペニスが猛つていくのがわかった。

「……熱い……もう、だめです……お兄さんの、太すぎて……もう、もう……っ！」

「……イッていいよ、美夜……」

ぐいっと、ねじこむように最奥を突く。それを数回繰り返すと、美夜の四肢が強ばり、首筋がぐいっと反りかえった。

「……いく……いっちゃいます……い……はああああああああんっ！」

美夜は、一瞬ガクガクと全身を痙攣させたあと、ぱたんとベッドに頭を落とした。

「……お兄さん……すご……気持ちい……はあ……はあ……」

めずらしく声はしっかり出ているのに、呂律がまわっていないようだった。

(すっかり、イけるようになったみたいだな……)

駿介は心のなかでそつと笑顔でうなずいた。

「それじゃ、優羽にもご褒美だ」
ほうび

ずるり……と、美夜のなかからペニスを引き抜き、優羽のヴァギナに押し当てる。

「……………え？ 優羽もいいの？」

優羽が律儀りちぎにおうかがいを立てると、美夜はコクンとうなずいた。

「……………はい。それに、本当はお姉さんがもらえるご褒美ですから……………」

「そうそう。甘えんぼの優羽がお姉さんモードで譲ってあげてる姿には、ちよつと感動したよ。ほら、ご褒美だ」

駿介はからかうように言つて、ぐいつと腰を突き入れた。

「お兄ちゃん……………きゃふうううん！」

ずぶずぶずぶ……………つと、優羽のなかに、駿介の陰茎が沈みこんでいく。

(……………狭……………くて、熱い……………)

「きゃあああああう……………お兄ちゃんが……………お兄ちゃんが優羽のオマ×コに入つてきてるううう……………」

優羽のなかは、相変わらずの狭さだ。乱暴に動いたら切れてしまふんじゃないかと思ふほどだった。

けれど駿介は、ソコが駿介のために伸縮し、合わせてくれることを知っている。





「優羽、動くぞ……」

最奥まで侵入を果たしたあと、そう声をかけて腰を動かしはじめる。

少しだけのピストンを、次第に長いものに変えていく。最初はほんの数センチを出し入れさせ、最後にはカリ首から根元までを自在に行き来させた。

絡みついてくる秘肉は、ねつとりと熱を孕み、やわやわと駿介を刺激する。

小さなお尻の下、子供のようなヴァギナを出入りする自分のものを見おろすのは、とても淫らがましい行為だった。

「……ああん、気持ちいいよう……お兄ちゃんのオチンメン、気持ちいいよう……」
妹の清らかな膪を、ずちちゅずちゅと筋張った陰茎が出入りする。

(……やべ……もう、イキそうだ……)

腰に力を入れ、抽送を速める。ぐちちゅぐちゅと音と泡を立て、優羽の陰唇はめくれたり、押しこめられたり、駿介のペニスの言いなりになっている。

「……お兄ちゃん……おにいちゃあん……すごい熱いよお……優羽、優羽、イッチャうよお……」

「優羽お姉さん、私も……一緒にしていいですか……」

ぐったりと横たわっていた美夜が、優羽の胸に手を伸ばし、そっとその乳首を摘むように刺激しはじめる。